

地球惑星科学委員会IUGG分科会IACS小委員会（第25期・第1回）議事要旨

1. 日時 令和3年3月10日（水）13:30~14:45
2. 会場 遠隔会議
3. 出席者 中村、東、青木、榎本、尾関、川村、杉浦、杉山、竹内、豊田
3. 議事

（1）第25期役員の決定について

世話人より委員長と幹事の決定について説明がなされ、第25期のIUGG分科会及びIACS小委員会の委員名簿（資料1、2）を確認した後、東委員が委員長に、豊田委員が幹事に就任することが決定した。

（2）議事要旨の提出に関する委員長一任について

委員長より、当委員会の議事要旨の提出については、議事要旨の案を委員へ回覧した後、日本学術会議へ提出する前の最終版の承認を委員長に一任することについて説明がなされ、承認された。

（3）小委員会委員間のメールアドレス共有について

委員長より、今後の委員会活動において委員のメールアドレスを委員間で共有する必要があることについて説明がなされ、承認された。

（4）第25期IACS小委員会の活動について

委員長より、2月18日に開催された学術会議主催の学術フォーラム「新たな地球観への挑戦—地球惑星科学の国際学術組織の活動と日本の貢献—」において、IUGG及びIACSの活動と日本の貢献についての講演があったことが紹介された。また、JpGU2021でも、IUGGを含む地球惑星科学分野の活動と学術会議との関りについてのユニオンセッションが開催されるとの説明がなされた。中村委員から、学術フォーラムは一般国民を、JpGUのユニオンセッションは主に科学者を対象としたものであるとの追加説明がなされた。また、学術会議がIUGGを含む地球惑星科学分野の国際学術団体に対して重要な支援を行っており、日本の一般国民や科学者の理解を得る必要があるとの説明がなされた。

（5）IACSの活動について

尾関委員から、積雪分類ワーキンググループの活動について紹介された。このワーキンググループは、2009年に出版された積雪の新国際分類の日本語版を作成することを目的としている。当初、2020年度に活動を終了する予定であったが、新型コロナウイルスの影響により、活動が遅れている。「新雪」と「こしまり雪」の分類が、新国際分類と現在の日本の分類では異なっているが、新国際分類の日本語版が完成すれば、分類方法が統一される。今後、積雪に関する論文を執筆する際には注意が必要であり、日本語版が完成され次第、日本雪氷学会の承認を受け、アナウンスする予定である。

幹事から、IACSの歴史、目的、組織、メンバー構成、活動について紹介された。活動の一環として、IACS Early Career Scientist Prize（論文賞）について紹介され、今年

は日本からの応募者がいなかったとの報告がなされた。この賞は学位取得後2年以内に出版した論文を対象するものであるため、学生の間に行った研究が対象になることが多いことが確認された。若手向けの学会発表を対象とする賞について質問があり、Graham Cogley Awardが該当する賞であるとの回答がなされた。国際賞への応募を増やすには、推薦書のひな形のようなものがあると、推薦しやすいのではないかという意見が出された。

幹事から、IACSの活動の一環として、IACSが、IUGGのIACS以外の協会又はIACS関連の学協会と共催して2年ごとに会合を開いているとの説明がなされた。今年の7月に釜山でIACS、IAMAS、IAPSOの共催で会合が開かれる予定であったが、新型コロナウイルスの影響により2025年に延期された。かわりにオンラインで3協会の合同セミナーが開催されることになった。

今後は研究のすそ野を広げる活動が重要であるとともに、IUGGやIACSの活動を周知することが重要であることが確認された。そのため、今後、IACS小委員会の委員がIACS関連の賞やセミナー等について連絡を受けた際、IACS小委員会及び関連する学協会のメーリングリストへ通知し、できるだけ広くアナウンスすることになった。

(6) その他

特になし。